

金環食への旅（沖縄）

秦 茂

1987年9月23日の金環食への旅は、この年3月29～30日のアフリカ ガボン日食、1984年のニューギニア・ニューカレドニア日食、その前年のインドネシア日食と比べると極めて近距離である。日本航空又は全日空で東京から那覇まで2時間20分、大阪からは2時間で那覇空港に到着する。晴れていると、鹿児島から那覇までの南西諸島の島々がパノラマのように美しく眺められる。

空港から車で10分程で、市街に入る。例えば日食行のように極端に滞在日数がなく、それでも沖縄を一通り見て置こうとする方のためには南部観光バスの“ひめゆり号”を利用されると良い。平和祈念堂、ひめゆりの塔などの沖縄南部の名所を短時間で見せてくれる。

更に島の中部から北の方に行かれる方のためには“やんばる号”がある。この観光バスは有名な海水浴場、ムーンビーチ、万座ビーチ（沖縄では10月までは十分に海水浴が出来る）、そして海洋博物記念公園のアクアポリスまでの一日コースである。

観光バスでは海水浴のための時間が取れないという方のためには、那覇市の中央に、長距離バスのバス・ターミナルがあり、名護よりもっと北に行かれる方のためには、名護にバス・ターミナルが作られている。なお、本島全域には電車が走っていない。

去年の金環食の中心線は恩納（オンナ）村中心街の北東1.6km付近から金武町のキャンプ・ハンセン（アメリカ軍基地）を通る。従って金環食が円心円におさまることにこだわる観測者、あるいは日食情報1986年11の光電測光による太陽の周縁減光を試みる方にとっては、この中心線に沿って、観測地を決めることが望ましい。

しかし、たゞ金環食を観察する、あるいは円心円にならないほうが面白いとお考えの方々にとっては、この金環食は沖縄本島をずっぽり包みこんでしまうのだから、本島内に自由に観測所を決めて良いことになる。

那覇市内

市内には沖縄グランドキャッスル、沖縄都ホテル、ハーバービューホテルなど600名以上が宿泊できる大ホテルの他に中小の宿泊施設が十分にある。しかし夏場8月、9月にはミーハー連に占領されてしまって、土日、連休にはホテルを見付けるのも容易ではない。また空の便の空席を探すのにも一苦労する。

那覇市内の外観と生活は、内地の中都市のそれと変った所はない。しかしココヤシの木、クロトン（観葉植物）、ハイビスカスなどが熱帯の情緒を盛りあげてくれる。個人住宅にも公共住宅にも一寸目立っているのが、屋上に作られた貯水タンクである。市では新しく住宅を設計する時には、市の水道本管から直接に屋上の貯水タンクに水を満タンにして置いて、室内の水

道は貯水タンクを經由して使うように指導しているとのことである。このような方法で一般家庭でも月に2000円程度水道料金が節約できるそうである。

あまり市内のあちこちを回ったわけではないが、スーパーマーケットの数が少ないと思った。沖縄の人達は東京や大阪などの大都会の人たちのように、ギスギスしたところがなく、大ようであり、車の運転なども大へんにゆとりのある運転をしている。

ここに着いたら少なくともリーダーはすぐに保健所の位置を確認しておいた方がよい。例えば沖縄では星野写真をとお考えの方にはハブの危険が伴う。ハブは夜行性で、昼は深いブッシュやサトウキビ畑の中などでゆっくり眠っているが、昼間でも人がハブに近付くと危害を受けることがあるそうだ。

もっとも生きているハブは一匹5000円にも売れるので、夜道を走る運転手さんなどはハブ狩りをして相当な小遣いのかせいでいる方もおられるという話である。

日食中心線付近の町（西海岸）

那覇から車で行くと最大の米軍キャンプのある町、嘉手納（カデナ）を初めに通過する。この米軍キャンプは700万坪の広大な敷地を持つ。

また、嘉手納に近い東南植物楽園は見ごたえがある観光地の一つである。

道路は広く、外国で経験するような立派な舗装道路がつづいている。恩納村へ行くにはこの道路を海岸線に沿って北上する。

もしも、あなたを乗せている車の運転手が年配者ならば昭和20年4月にこの海岸に、18万のアメリカ軍が上陸し、軍は上陸地点から南北に分れ、北方での抵抗が殆どなかったことから、北に向った米軍も南に引き返し二つの波となって日本軍を南に南に追い込み、摩文仁（マブミ）の丘での激戦を迎える話を聞かせてくれる筈である。



写真1 万座ビーチホテル

やがて車は恩納村に入る。村の西海岸はすてきな海水浴場となっている。近くにある二つのホテル、ムーンビーチ、万座ビーチは例えばインドネシア日食に行かれた方は、バリ島にあるバリ・ビーチホテルなどを想像されると良い。アメリカ・ヨーロッパの高級ホテルなみの設備である。

一寸はなれて国民宿舎がある。それにホテル・ミュキビーチなどもあるが、ここはベット様式ではなく畳の間である。このあたりからだったら日食中心線の通過する海岸まで歩いて行くことができる。

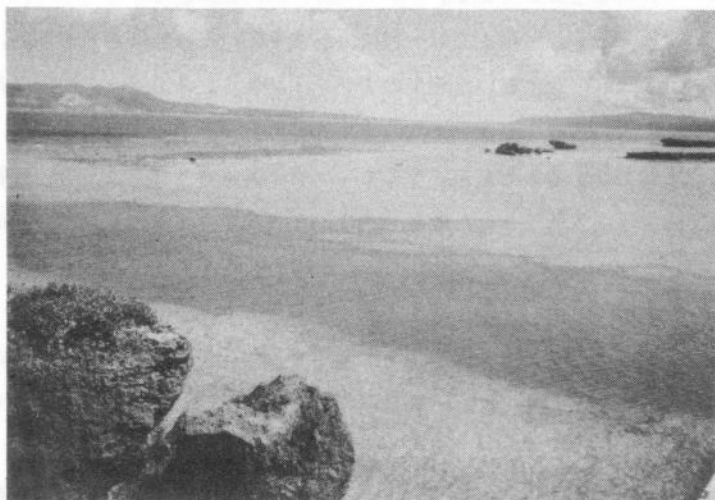


写真2 万座毛

中心線から1 km以上はなれているが万座毛と呼ばれている一帯は芝生の美しい一画となっている。何台ものバスが駐車できるし、トイレ、売店も完備している。万座毛のすぐ下は切り立った岩壁になっていて、見下した海の色が美しい。

海中公園、パイン園、アクアポリス

この海岸を更に北上すると海中公園がある。時間があったらガラスボートに乗って見ると良い。沖縄で見る熱帯魚はことの外、鮮かである。やがて名護市に着くが、ここを左折して本部半島の先端に出ると、1975年に開催された海洋博の記念公園がある。広い公園内にはいくつかのバビリオンがあって、上映時間は15分だが、プラネタリウムもある。ここの海にアクアポリスがあり、実は1977年の北太平洋を通る日食の際に、タグボートで、アクアポリスを北太平洋に運ぶことは出来ないかと真剣に考えたことがあった。

名護市の近郊にはパイナップル園が多い。その一つに立ちよって見た。パイン園は沖縄南部ではあまり見られない。それはパイナップルが沖縄中部の赤土（酸性土壌）で良く生育するため、また湿地帯をきらうために多く傾斜地に栽培される。冬はパインの酸味が強くなり、8

月9月がバイナブルの美味しい季節だとのことである。

私が立ちよったバイン園では、観光客が集まると“ハブとマンガース”の決闘を見せていた。素早いマンガースにハブが咬まれてしまうと、このハブはすぐに強壮剤に化けて、観光客に売り出されるとのことである。

キャンプ・ハンセン

名護-石川、自動車道沿いに、キャンプ・ハンセンがある。東海岸に抜ける日食中心線は、キャンプ中央の辺にある寺院の近くを通過する。

ここで車を降りて候補地を探して見る。キャンプ前の広い道路をはさんで反対側は米軍によって急に栄えた町なみらしく、海岸までの一帯にはあまり広い候補地は見当たらない。しかし、米軍キャンプ内には手入れの行き届いた芝生のグラウンドが多く、多分ゲートにいる衛兵を通じて天体観測に使いたいといえ、グラウンド内の使用許可が下りるかもしれない。

中心線の東海岸で観測をと考えるなら、米軍キャンプの責任者と交渉の上で、那覇又は沖縄市からバスか車で観測地に入ることにしか考えられない。西海岸と比べてそれ程、宿泊施設が貧弱なのである。

那覇南部の観測地

前にも述べたように、金環食帯は沖縄本土をすっぽり包み込む形になっている。従って幾何学的な同心円の金環にこだわらないなら、那覇南部でも、那覇市内のホテルの屋上でも観測が可能である。

那覇市から南の方へ車で行って見た。初めに行ったのは豊見城・城跡公園で、駐車場になっている平坦地には望遠鏡が設置できる。しかし、どうにも近くに建てられた鉄塔と、はりめぐらされた電線が目障りなのである。勿論電線をさけた位置に望遠鏡を組立てることは出来るが、もう一つの欠点としては公園が有料ということがある。

更に南進すると市営の競技場がある。実は道路のあちこちに、昭和62年海邦国体開催の立看板や広告塔が目につく。来年の10月には那覇市で第42回国体が開かれることになっていて、9月にはその準備のため競技場の使用は困難になるかも知れない。

9月後半は国体の準備期間と日食が重なっているので、ホテルや航空機の混雑もある程度、考えておく方が良い。航空券の早目の手配、国民宿舎を使うならば半年以上前からの予約をおすすめする。

最南端の摩文仁の丘まで行って見た。この丘は標高80mで夕方5時までは市営のバスで頂上にのぼることができる。丘の後方に平和祈念堂があり、丘と祈念堂の間にある平和記念公園は、1000人位の観測者が入っても大丈夫な程、広い芝生になっている。低い電柱や電線があるけれども、これは摩文仁の丘の陰に入ってしまうと、公園からの前景をさまたげない。公園の入口には、トイレも売店もある。ひめゆりの塔はここから車で10分程の距離である。途中に沖縄サンゴ園やガラス工場があって、お土産としてサンゴ製品、ガラス細工を考えてい



写真3 海邦国体の広告塔（9月16日撮す）

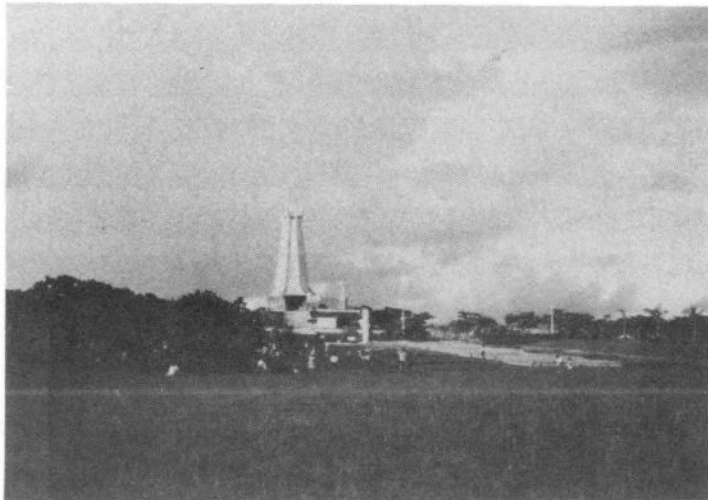


写真4 平和記念公園
手前に摩文仁の丘がある。

る方には利用価値がある。

沖縄の天候、その他

那覇市内のホテルからは、琉球料理と民族舞踊の“浦島”とか料理だけの“見栄”とか、海鮮料理の“三郎”などなどレストランにはことかかない。ステーキハウスもある。これは現地入りしてからゆっくり検討されるようおすすめして、詳しいことは割愛する。

次に三日間の滞在中に見聞した天候のことについて述べる。土地の人に聞いて見ると、9月、10月は台風が通過しない限り晴天とのことである。滞在していた範囲内でのことだが、日ざしは強いが頭上に雨雲があらわれると、せまい範囲だけに激しい雨が降りつける。運転手はスコールと呼んでいるが、2～3分先に進むと全く乾いた道路に行きあたり、今までの雨がウソのようである。

シンガポールあたりで体験する熱帯性スコールに似ている。一回だけだが、太陽がキラキラ照りつけているのに、雨が落ちてくる、お天気雨にも遭った。

金環食の、あるいは星野写真の撮影中にスコールに遭わないという保証はないので、この時期は、望遠鏡がすっぽり包みこめるだけのビニールシートと雨傘の用意が必要なのではあるまいか。